

PhantasyStarOnline2 $\sqrt{\quad}$ of Another

今井綾奈

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

EP6ノーマルエンド直後のマトイチちゃんがもし、EP1の出会いの寸前に逆行したら？という物語。

安藤役は作者のPSO2キャラを当てています。

もしかしたら作者のフレンドさんの方々が出るかもしれません。

目次

第一話	終わり始まり	1
第二話	邂逅	6
第三話	提案と結成	10
第四話	龍と少女	16
第五話	世界の違いと兄妹	20
第六話	わたしだけのおもいで	26

第一話 終わりと始まり

隣にいるアリシアの内側から大きな闇が溢れ返りそうになる。

それを必死に押さえ込むように胸を押さえ、時空を歪ませながら時間遡行をしようとする貴女へわたしは必死に手を伸ばした。

「ダメだよーそういうのはしないって……約束したじゃない！」

「それでも、これだけはどうしようもないんだ……これが全ての元凶だっというなら……宇宙を破滅させる存在だっというなら！」

『何も滅ぼすものがない場所へ跳べばいい』

アリシアの声が二つ重なった瞬間、彼女の武器であるコートグライドを一つだけ残してその場には何も無くなってしまった。

わたしの大好きな彼女はこの瞬間、この世に還らぬ人となってしまった。

「やだ……やだよお」

覚束ない足取りで彼女の武器を拾う。

わたしと同じ光属性を表すフォトンカラーである純白の刃を持った剣は主人を失ったにも関わらず煌々と輝き続ける。

「どっちかを残して犠牲になるなんて……もうしないって約束したじゃない……！こんな結末……認められる訳、ないじゃない！」

彼女の遺したコートグライドとクラリツサを握る手に力が入る。

わたしの体内を巡る莫大なフォトンが流れ込んでいるにも関わらず二つの武器は際限なくわたしのフォトンを吸収して……やがてそれは一つのイレギュラーを起こす。

アリシアのいたその場所に小さな裂け目が生まれた。

それはだんだん大きくなって次第に周囲にあつたものを問答無用で飲み込み始める。

『マトイツー！今すぐその場所を離れるんだ！』

呆然としていたシャオくんがわたしへ向けて焦ったように通信を入れてくるがそれはもう出来ない指示だった。

何しろわたしは彼女遺したコートグライドを拾ってその場所で蹲ってしまっていたのだから。

「シャオくん、わたしももうダメみたい。後のことは……みんなに託すから、ダーカーやフォトナーの脅威のない平和な世界を作ってね」
終の女神は討ち倒した。

アリシアという一人の少女を犠牲にして……その代償がわたしの存在が消えることだというなら喜んで受け入れよう。

でも、もしわたしの願いが一つ叶うならば……今度はわたしが貴女を助けにいきたい。

貴女が何度も何度も絶望を味わいながらもわたしを救おうと頑張ってくれたように……今度は私が貴女をどれだけ辛い試練が待っているとも救いたい。

クラリツサとコートグライドを抱きしめたまま私は裂け目の中に呑み込まれる。

最後にシャオくんとシエラちゃんの声が聞こえたけど、何を言っているかは全く聞き取れないまま意識を手放した。

—— 貴女の望みは何？

叶うなら、今度こそはアリシアを救うために過去に戻りたい

—— それがたとえ辛い道のりでも？

わたしがいるのはアリシアが辛い思いをしたからだもん、今度はわたしが助けてあげなきゃいけない番なんだ

—— そっか、わたしにとってはまだ知らない思い出が “わたし” には沢山あるんだね

うん、全部アリシアがわたしにくれたものだから。

今度はわたしがアリシアに明るい未来^{明日}をあげたい。

—— それなら、やることは一つだね。いつてらっしやい……貴女たちの物語が始まったあの場所へ

その言葉を最後にわたしはどこか強い方向へ引つ張られるような感覚を覚える、本来ならわたしが味わうことがないはずの時間遡行す

る際の独特の不快感、やがてわたしを包んでいた不快感はなくなり……その代わりにわたしの足はしつかりと地を踏みつけた。

安らぎを与えてくれるような優しい風、深呼吸すれば鼻腔をくすぐる緑の香りがする。

瞳を開けばそこはわたしとアリシアが初めてあった場所。

あのわたしたちの約束の場所に私は立っていた。

「えっと、これはどうゆうこと……なんだろう？」

咄嗟にシエラちゃんに通信を繋ごうとしても回線は繋がっていないのか応答はない。

アークスの体制が一新された時に新設した回線は全て使えなかった。

アリシアはもちろん、シャオくん、サラ、メルランディアさん、クーナちゃん、クラリスクレイスちゃん……六芒の人たちやアークスシツプそのものに通信が繋がらないのだ。

「どこにも繋がらない……そうだ、今は何年の何日……？」

支給されていた端末を開いて左上に表示されている日付を見てわたしは驚愕した。

「嘘……新光歴238年の2月20日……？」

わたしがさつきまでいたのは間違いなく2442年の3月31日の筈だった。

あの渦に巻き込まれてあの空間で誰かと話をしたのはおぼろげに覚えている。

どんな話をしてわたしがなんで返したのかは思い出せないけれど、あそこで何かあったのは間違い無いのかもしれない。

新光歴238年2/20……この日、アリシアはわたしと初めて出会って……わたしにとっては記憶はなくとも再会を果たした運命の日だった。

「戻ってきちゃったんだ……わたしがわたしのままこの場所まで」

服装も最後に着ていたイノセントクラスタのまま、手に持ったクラリツサも明錫クラリツサⅢのままだし、オマケには彼女のコートグライドの片割れまで持ったままだった。

「クラリツサは表立っては使えないよね……だったらアリシアのこれを使うしかないんだけど……」

わたしのフォトンの放出力に耐えられる武器はあまり多くない。

大抵の武器は一度テクニックを使えば壊れてしまうし、それ以外の武器だって2〜3回使えば壊れてしまう。

これこそ創世器や彼女のように守護輝士用にチューンアップされた武器でないとなたしには扱えなかったのだが……

「ねえ、アリシア……わたしに力、貸してくれる？」

ここにはいない彼女に問い掛ければ答えるように僅かにフォトンコートが輝いた。

まるで任せろと言わんばかりに力強く輝いた刃を見てわたしは微笑む。

「うん、なら大丈夫。今度はわたしが貴女を救うよ」

思いつくだけでもやることはたくさんある。

ダークファルスの依代の浄化、深淵なる闇復活の阻止、マザーの生存、そしてシバとの和解と本当の深淵なる闇の討伐。

どれも一筋縄ではいかないものばかりだけど今度こそ失敗しないように頑張らなきゃいけない。

ガサガサとナベリウスの森が揺れる。

覚えのある殺意の籠もった視線がわたしへと向けられる。

アリシアの遺したコートグライドをしっかりと握ってクラリツサを待機状態へ移す。

「わたし、テクニックをメインに戦ってるけど……別に接近戦ができないわけじゃないんだよね。アリシアの戦い方をずっと見てきたしそういう風に生まれてきてるからさ」

トンつと散歩でもするようにダーカーへ歩み寄ってすれ違いざまに2体のダーカーの首を撥ねて消滅させる。

斬った感覚は何も問題ない、コートグライドの刃はつきさつきまでシバとの激闘を潜り抜けてきたとは思えないほどの切れ味だった。

流石は守護輝士専用チューンナップされた逸品物だけはある。

「さて、それじゃあこの森に現れたダーカーを消しちゃおうか」

悲鳴と木々の倒れる音のする方へ視線を向けてわたしは走り出した。

——これは貴女への贖罪だ、貴女の命を弄び……大切なものを失くさせてしまった私から貴女への償い。

——どうか、彼女を渦巻く悲しみの連鎖を……断ち切れることを私は貴女に願うばかりだ。

——だけどどうか忘れないで欲しい。これは貴女自身の物語だ、他の誰でもないマトイあなたの想うままに進んで欲しい

第二話 邂逅

森を駆け抜けながら混乱と同時に部隊から離れて孤立したアークス達の救助を行う。

「落ち着いて仲間と合流して、状況をアークスシップに伝えてね」

「はっ、はい！ありがとうございます！」

着ている服からまだ最終試験を受けにきた訓練生だとわかる女の子がわたしに頭を上げてから立ち去っていく。

少女を見送ってからわたしは再び森の中を駆け抜ける。

「アリシアとアフィンってこんな最悪な状況からアークスとしての活動が始まったんだ……」

アリシアが特別抜きんでた能力を持ったアークスだったことを除けばアフィンはアークスの中でもかなりの実力者だった。

それこそクラス提唱者のような特別な能力があるわけでもないし、少し臆病なところもあったけど、それでもあの決戦で六芒と肩を並べて最後まで戦い抜いた彼は間違いなく一流のアークスだろう。

「ダーカーの気配が多すぎてどこに行けばいいかわかんないっ！」

身体中から溢れるフォトン周囲に散らして擬似的なレーザーの様に扱っても圧倒的なダーカーの反応のせいどこに人がいるのかさえわからない状態だった。

コートグライドで次々とダーカーを消滅させて数を減らしても次々と出てこられたらわたしだって流石に普段のような感じではないられない。

「ちっ、邪魔だっって言ってるでしょ」

わたしがクラリスクレイスだったときのような乱雑な口調が表に出てくる、アリシアにあつてから使わないように、優しい人たちに出会ってから2度と表に出さないと思ってたけどそんな状況じゃない。

コートグライドのフォトンコートの刃を圧倒的な密度の光属性のフォトンで覆えばその刀身はスラツと細身の長刀へと姿を変える。

一振りすれば周囲に溢れていたダーカーを一刀の元に一掃する。

「これならまだ戦える。もっと効率的に屠っていくないと本当に犠牲

者が増えるだけ」

一息、大きく深呼吸してわたしは大地を蹴り飛ばす。

見慣れた森、わたしにとつて庭にも近い感覚の森の中を疾走しながら剣を振り、ダーカーを斬り裂く。

そして、少し開けたところに出ればそこには見慣れた姿。

わたしにとつては親友とも呼べる少年、アフィンがダーカーと戦っていた。

しかし、そこにはアフィンしかいなかった。

彼と共にいるはずのアリシアはそこにはいなかった。

この惨状の中で考えられる結果はただ一つ。

「ううん、そんなはずない。たまたま一緒にいなかったただけだよ。きつとそうだ……」

最悪の結末を考えてしまった思考をリセットしてアフィンの背後に這い寄っていた最後のダーカーを斬り伏せる。

「大丈夫？」

「あ、ああ。助けてくれてありがとうがとう部隊のみんなとはぐれちゃってひとりで戦うのも限界だと思ってたところだったんだ」

「ひとり……？ 貴方ひとりで戦ってたの？」

「えっ？ そうだけど……どうかしたのか？」

アフィンのその言葉にガツンと後頭部を殴られたような感覚を覚える。

アリシアがいない、この正式アークスになる為の最終試験に参加していない……？

そんなことがありえるのだろうか、【仮面】としての彼女が時間を渡る際は必ずアリシアとわたしがいた筈だ。

それに伴って誰一人かけることなくわたし達と関わった人がいた筈なのに……わたしが一番助けたい人は居ない……？

「そんなの……理不尽だよ。わたしのことは自分を擦り減らしてまで助けにきたのに……わたしには助けさせてくれないなんて」

「えっと、大丈夫か……？」

俯いて小さな声で喋っていたわたしを案じてアフィンは心配そう

にわたしの顔を覗いてくる。

「うん……大丈夫だよ。貴方はそのまま部隊の人たちと合流してね。わたしはもう少し逸れた人たちを助けにいくから」

「それはいいんだけどさ……あんた相当暗い顔してるぜ。まだ候補生の俺がいうのもなんだけどさ、そのまままだといずれ死んじゃうぞ」

「ありがとう、でもわたし……それなりに強いから安心して」

アフィンに背を向けてそのまま駆け出す。

背後からわたしを心配するこれが聞こえたけど、それを無視して駆け抜ける。

視界がぼやけて前がよく見えない。

風に乗って涙が出て流れているなんてことは認めたくない。

それを自認して仕舞えばアリシアがいないことを認めてしまいそうになるから認められなかった。

「ううっ……ずるいよ……いつも、いつもいつも……ずるいよー！」

半ば叫ぶように森の中を走り抜ける。

いつの間にかダーカーのいないエリアまで走り抜けてしまったよう……でもそこは出会ってすぐの頃アリシアと他愛のない話をした場所だった。

近くにあった小さな岩場に腰をかける。

ダーカーの返り血をフォトンを駆使して落として、ゆっくりと空を見上げる。

「本当に……あなたがない世界なの……？」

空にそれを問いかけても返ってはこない。

無言の空間に先程までとは全く違う優しく爽やかな風が私の身体を撫でる。

「こんなところで、一体何をしていますか？マトイさん？」

そんな空間にわたしの中の全てが警笛を鳴らす声が響いた。

振り向いて咄嗟にクラリツサを呼び出してコートグライドを構えればそこには見たことのない服を着てわたしが右手に持つコートグライドの片割れを持った女性がわたしを見ていた。

「どうして……貴女がここに……？」

「簡単な話ですよ、守護輝士にここに飛ばされた……と言うしかありませんね」

困りました、とでも言いたげな彼女……終の女神シバは左手を頬に当ててそう答えたのだった。

第三話 提案と結成

「アリシアに飛ばされたって……どういふこと？」

「私はあなた方に倒されたの？：ですか？」

彼女の問いかけに私は静かに頷く。

そうすれば彼女は手に持ったコートグライドの片割れを見つめて口を開いた。

「私のはあのあと、守護輝士と共に彼女が連れて行った原初の闇を討滅するために次元の狭間で守護輝士と共に戦ったのです」

「え……？」

「当然でしょう、あそこまで可能性の光を見せられて挙げ句の果てには最後まで救うと手を伸ばし続けた守護輝士に私が出来ることなどその程度しかありませんからね」

まあ、それも失敗に終わったわけですがと付け加えて彼女はわたしにコートグライドの片割れを差し出す。

「守護輝士からの貴女へ渡すようにと言われてきました」

「えっ、アリシアから……？」

ゆっくりと手を伸ばして、シバの差し出したその剣を手に持つ。

2 振り揃ってこそ真価を発揮する守護の剣は瞬く間にフォトンコート刃の刃を目映いばかりの純白に染め上げ、周囲を照らした。

「彼女が今、どのような状況にあるのか……私にもわかりませんが、こうして〃人として生きる〃という選択を一方的に与えられたのでは私としても納得がいきません」

「……何が言いたいのか？」

「マトイさん、私と協力しませんか？あの救うばかりで自分のことは一切視野に入れない大馬鹿の守護輝士を今度は有無を言わずに一方的に救ってやるんですよ」

悪いことを思いついたと言わんばかりの彼女の顔はわたしに〃勿論やりますよね？〃と挑発的な物のままで問いかける。

「それに、私もちょうど困っていたんです。原初の闇を宿していたときのような圧倒的な力は今はありません。精々、貴女と守護輝士を相

手にしても辛勝出来るくらいの力しかありませんので」

「それ、十分に強すぎるよ……」

「貴女に換算すれば今の貴女が一般人になるレベルの変化ですね」

本当に協力するつもりがあるのだろうか。

しれっと弱くなってもあなたよりも強いですなんて言われて素直に協力する人が世界にどれだけいるのだろうか？

それでも……わたしにとってはアリシアがいなくてもいいだけでここは知らない世界だ。

わたしにとっては数時間前まで死戦を繰り広げた相手でもアリシアを救う為なら手を取ってその方法を模索するしかない。

きつと、アリシアだってそれを望んで彼女をわたしの近くに飛ばして武器まで預けたのだろう。

「……気に食わないけど、その提案を受け入れるよ」

「そうですか、まあ私としても断られると困っていたので助かります」

前の世界ではついぞ取るとこのなかったシバの手をわたしは強く握った。

「それで、このあとはどうするつもりなの？」

「そうですねえ、一応彼女のいる場所の想像はつくのですが」

「っ！どこにいるの?!?!」

「落ち着きなさい、今の私たちでは到底たどり着けない場所ですよ。ほら、空を見上げてみなさい」

シバに指差され見上げた空には明らかにみたことのない惑星が一つ浮かんでいた。

ウオパールでもアムドウスキアでもリリーパでもない。

見た目だけならあのオメガの不気味ささえ優に超えるほどの悍ましさを一目で与えるその星はまるで闇がそのまま惑星となったような……そんな禍々しさを感じさせるモノが浮かんでいた。

「なに……あれ……？」

「私にもわかりませんよ。ただ、あの中枢からあの忌々しい闇の気配を感じるので大方その中にいるのでしよう」

どう考えても普通のアークスでは惨殺されて終りだろう。

もしかしたら星から溢れ出そうな悍しい瘴気に触れて気が狂ってしまいかも知れない。

「だから言ったでしょう？ “今の私たち”では近づくこともできないと」

「でも、あんなのどうやって近づけば……」

「その為にまずダークファアルスの力を集めるんですよ。私たちの存在をよりダーカーやあの瘴気に適応するように作り替えなければなりません……まあ、貴女の場合はその剣が何がなんでも護ってくれるでしょうが」

コートグライドを一瞥してシバは自分の着ている服を軽く触れてため息をついた。

「私の場合もおそらくこの服がある程度はあの瘴気を弾いてくれるでしょうが……それでも身体の内^に闇の因子が全くない状態で行くのは流石の私でも役に立ちませんし」

「……とりあえずはダークファアルスを倒して回るってことでいいの？」

「別に倒していつでも構いませんが……協力を得られるのが一番でしょうが」

確かに結果として戦力は多い方がいい。

ダークファアルスの依代達はそれぞれが特化した力を持つ。

圧倒的な力を誇り星すらも呑み込む【巨軀^{エルダー}】

無数の蟲型ダーカーを率いて軍を成す【若人^{アブレンティス}】

時間を操り超高等テクニクを駆使する【敗者^{ルイサー}】

自身に取り込んだ物を使役して無制限に生み出す【双子^{ダブル}】

それだけの戦力を揃えないと恐らく原初の闇と呼ばれる災厄には勝てない。

今よりも圧倒的な能力を持ったフォトナーを持ってしても破滅の一途を辿るしか選択肢のなかった相手を真正面から打ち倒すには同

じだけの力を分けたモノを立ち向かわせるしかない。

「それに、ペルソナと言いましたか。守護輝士がダークファルスなつた別次元の彼女を」

「うん、あの人も紛れもないアリシアだよ」

「彼女がこの世界に来ているかどうか、これが戦局の大きな分岐点になります。彼女が守護輝士と同じ能力を持っているならそれだけで原初の闇を倒す可能性が増えるわけですからね」

「淡々と今後に必要なことをあげていくシバにわたしは思わず口を開いたまま硬直してしまう。」

力は減少していたとしてもアークスを壊滅寸前まで追い込んだ頭脳は健在というわけなのだろう。

「まあなんにしてもまずは星を渡るための船が必要なわけですが」

「え？アークスシップに行くんじゃないの？」

「行ってどうするんですか？貴女は今アークスではないでしょうに」

「あつ……」

頭では確かにわかっていたはずだが、自然と頭に浮かんで口にしてしまったことでわたしは少し恥ずかしくなる。

正式にアークスとして活動していたのはわたしはそんなに長くない。

精々2年か2年半と言ったところだろうか。

クラリスクレイスとして活動していたときのアレはアークスとは呼べないものだったと思うし、アークスとしての普通はなくて当たり前のものであったから。

それでも無意識に口走ったあたりわたしもアークスとしての行動が身に染みているということだろう。

「でも、船なんてどうするの？そう簡単に手に入らないし貸してくれる人もいないと思うけど……」

わたしのその問いにシバは見覚えのある悪い笑顔を浮かべた。

「この星には確か父親ルサーの研究施設がありましたね」

「……うん、確かあったと思うけど」

「では、そこから拝借しましょう」

「……え？」

「そこから拝借しましょう。まあ、この肉体は彼の娘みたいなものですし問題はないでしょう」

しれっと当たり前のように口にするシバにわたしは再び啞然とする。

「でも、それって強だも「いえ、借りるんですよマトイさん」……はい」

最後まで口にする前にまさかの割り込みまでして圧をかけてくる彼女はどこか楽しそうな気さえした。

「やることは決まりましたね。それではまずはその研究所とやらを見つけてみましょうか」

「どうしてこうなったのかなあ……」

「私だって能力が限定されていなければ船など必要ありませんよ。それは貴女だって同じでしょう？2代目クラリスクレイスさん？」

六芒均衡としての特権の一つである任意の空間転移能力。

今のわたしにはそれが無いことを彼女も知っているのだろう。

シバの言葉にわたしはため息を吐いて、彼女の後を歩き出す。

「そういうえばシバさんはなんの武器使うの？戦ったときはたくさん使ってたけど」

「シバで構いませんよマトイさん。今の私はガンスラッシュを扱かうクラスですね。守護輝士は“ラスター”なんて口にしてましたが“光輝”など私に最も合わない言葉だと思いませんか？」

手元に出現させた異質な形の銃剣……ヴィクトワルエーレを軽く振ってフォトンの粒子へと変換させて待機状態へと移行させた。

「まあ、足手まといにはならない程度に戦えますので安心してください」

「その辺りの心配はしてないんだけど……ラスターかあ、聞いたことないしアリシアがその戦い方してるのも見たことないけどどんな感じに戦うの？」

「それは見て覚えてくださいな。私も守護輝士と共に戦った時にこの姿になっていたのでもまいち説明に困るのです」

止めた足を再び動き出してシバは自嘲気味に笑う。

「自身の力が正確に把握出来ていないのは情けない話ですが、少しばかり時間をいただければ100%の状態で戦ってみせますよ」

自信に溢れているようでどこか寂しさの覚えるような声を発する背中はずくしく寂しそうに見えて、わたしは自然と彼女の隣に立っていた。

「わたしもマトイでいいよ。アリシアを救うまではわたし達2人で頑張らないとだし……それに仲間に他人行儀なんてしてたら怒られちゃうから」

それを聞いたシバは少しばかり呆けた顔をしたがすぐに大きな声で笑い始めた。

「なっ、何がおかしいの!?!」

「いえ、守護輝士と同じで貴女も甘いなと思っただけです。そうです、ねこれから共に戦う『仲間』に遠慮などしてはいけませんか」

涙が出るほど笑ったシバはこの瞳に溜まった涙を軽く拭いてわたしへと軽く顔を向ける。

「あたためて宜しくお願いしますよ。マトイ」

「わたしこそ、よろしくね。シバ」

こうしてわたしと彼女の旅路が幕を開けることとなった。

最初から強奪紛いのことをやる羽目になったが先の事を考えればこれは避けては通れない道なのだろう。

(待っててねアリシア……必ず迎えに行くから)

第四話 龍と少女

「そっか、マトイとシバは無事合流出来たんだ」

「ああ、私も一応遠目に確認してきたがなんとか手を組んだらしい」

果てない暗闇の中、2人の少女が顔も合わせずに語り合う。

紺色の生地には赤い刺繍の入ったコートを身に纏い、脹脛程まである白髪を靡かせて少女は口を開く。

「私は外には出られないから、貴女に任せることになるけど……それとなく私の…… 私たち」の辿った道のりをなぞる様に事を進めてほしい」

「出来なくはないが私にお前の真似をしろというのか？」

「真似も何も本人そのものでしょ。その偏屈な話し方をやめて元に戻しなよ」

呆れた様に笑う少女に姿が瓜二つの少女はため息を吐く。

「そう簡単なものじゃない。私の事はすぐマトイにバレるぞ」

「それでもいいんじゃない？ 私の中の“こいつ”を消し去るために貴女がマトイを導く、まあついでにダークファアルスの連中も回収してさ」

しばらくの沈黙が2人の間に流れる。

ようやく振り向いた少女は同じ顔の少女へ向かって口を開いた。

「原初の闇と共に私を殺して貴女も一緒に死ぬ。シバの器としての能力を貴女に無理やり流したのはそれが目的なんだからさ」

「わかっている。彼女達には辛い思いをさせるが……それでもやるしかない」

2人はお互いの顔を見て静かに頷き合う。

やがて色違いの黒衣を着たもう1人の少女は背を向けて歩き出した。

「ダークファアルス達も私たちと共にこの世界に憑依している可能性は決してゼロじゃない。マトイに関わるのを避けたいならまずはダークファアルス達と接触してくれる？」

背中越しに掛けられた声に黒衣の少女は頷いた。

「先ずはルーサーにでも接触しみる事にする。上手くいけば『アリシア』としてアークスとして他のダークファルスに接触していく」

そう言い残して黒衣の少女は闇を纏いその姿を消した。

1人残った少女は美しく光る惑星ナベリウスを見つめる。

「早く来てよマトイ……この悲しみの連鎖を終わらせるために。私の身体がこいつを抑え込めるうちに」

まるで懇願する様に少女はそう呟いて瞳を閉じた。

シバと共に歩き始めてから数時間が経過した。

今わたしたちがいるのはナベリウスの凍土エリアだった。

天候は快晴、しかし肌に突き刺す様な寒さが私の身体を撫でる。

「さむい……」

「その様な格好では当然でしょうに……」

そう口にするシバもかなり露出の多い服装ゆえに彼女も相当寒そうなものなのだが、先ほどから顔色ひとつ変えずにしているのはどういうことなのだろうか。

「シバだって露出の多い格好してるじゃん」

「私は火属性のフォトンで身体を覆っていますから」

「なにそれずるい！」

「ずるいと言われましても……このくらい私でなくても思いつくと思いませんが」

シバにジト目で見られてわたしは言葉を詰まらせる。

アリシアと一緒に凍土エリアに来る時は事前に彼女が掛けてくれていたから私にはその習慣がなかった。

大気中のフォトンに干渉して炎の属性へと変換して薄く身体中を覆う様に纏えば先ほどまでわたしの身体を突き抜けていた冷気を感じなくなっってほっと一息つく。

「それよりも私の持つ記録ではこのあたりに研究所があるはずなんで

すが」

「どこを見ても真つ白な雪原しか見えないけどね」

「……そういうことは言わなくていいんですよ」

2人揃ってため息を吐く。

吐き出した息はその寒さゆえに大気中で凍りついてすぐに消えていった。

更に数時間にわたって歩き続けてわたしとシバの間にも流石に会話のネタがなくなってきた頃。

「貴女達、こんな寒いところで何してるの？」

青い髪の少女が成龍のクロームドラゴンと共にわたしたちの前に現れたのだ。

わたしの知っている彼女とは違う。

なにより目の前の少女は彼女の象徴たる創世器『透刃マイ』を所持していないが、その鈴の様に美しく響く声をわたしは聞き間違えなかった。

六芒均衡の零、新設されたアークスの体制では情報部の次席を務めていた少女、クーナがそこにはいた。

「こんな寒いところでそんな薄着して凍え死にたいの？」

『姉さん、そんなこと言ったらダメじゃないか』

「そうはいうけどさハドレッド……この2人の格好みたらそう思うじゃない」

ハドレッドと呼ばれたクロームドラゴンと仲良さそうに話す彼女を見てわたしは空いた口が塞がらなかつた。

ハドレッドという名前はアシアにも目の前にいるクーナちゃんにも話をしてもらって聞いた事はある。

だが、今この時点でクーナちゃんとハドレッドが一緒にいる事はなかった。

やはり、この世界は何かが違う。

アシアが行ってきた事象、彼女がいなければ解決しなかつた事柄

がその代替え案を出すかの様にそれほど悪くない方向へと解決している。

「えっと、わたしたち人を探してここまできたの」

「ルーサーという名前に覚えはありませんか？」

わたしたちの問いにクーナちゃんは一瞬顔を顰めてどこかへ通信を行った。

通信用のホロウインドウを開いたままクーナちゃんはわたしたちへ再び視線を向ける。

「貴女達名前は？」

「わたしはマトイ、そして隣の彼女はシバ」

まとめて2人分の自己紹介を済ませばクーナちゃんはホロウインドウに映る人物へ確認をとる。

「あなた方の探し人があなた方を連れてこいとのことですのでご同行願えますか？」

その問いにわたしとシバは頷いた。

「そういえば自己紹介がまだでしたね。私の名前はクーナ、そしてこの子は弟のハドレッドです。さあ、ハドレッドの背に乗ってください」

促されるままハドレッドの背に乗れば彼は身体を縮ませる。

『しっかり捕まってくてください』

「じゃないと振り落とされるわよ」

「えっ！」

驚きの声を上げた瞬間、ハドレッドの身体が勢いよく雪原の上を駆け抜けた。

向かうのはルーサーのいるであろう雪原の研究所。

ここに来る前は一度も踏み入ることのなかった知欲の闇に溺れた科学者の研究室にわたしは数十分後に足を踏み入れることとなる。

第5話 世界の違いと兄妹

ハドレットの背に乗り雪原を駆け抜けること数十分。

わたし達は高度な迷彩処理を行われた結界を通り抜け巨大な研究施設へとたどり着いていた。

ハドレットの背から降りたわたし達はクーナちゃんの後を追って施設内を歩いていく。

「何故、あなた方がルーサーの名を知っていたんですか？あの男は曲がりなりにもアークスの中では管理官という立場にはいますがそれでも六芒の一角が矢面に立っているため名は知れ渡らないはずです」

クーナちゃんは扉のロックを虹彩認証で解除しながら私たちに問いかける。

「わたし達も少なからず彼に縁があつてね。今回は協力を得たくて探していたの」

「なるほど、それが信用に足る理由とは私は思いませんけどね」
突っぱねるような言葉にわたしは思わず顔を顰めてしまった。

だが、それは彼女のいうことが正しいと思つてしまったからこそわたしは何も言い返せなかった。

わたしだつてアリシアに同じように訪ねてくる人がいれば怪しんでしまうだろうし怪訝な表情をしてしまう。

「それでは私はここで、ルーサーと姉さんがこの先で待つています」
クーナちゃんはわたし達にそれだけ告げるとハドレットとその場をさつてしまった。

わたしとシバは扉を見つめてその扉に手をかけた。

「やあ、そろそろ来る頃合いだと思つていたよ。お嬢さん、それと終の女神シバ」

「そのような話し方だから誤解されるんですよルーサー兄様」

「……いや、今のは普通の挨拶だっただろう。僕は普段通りに挨拶したはずだよハリエツト」

わたし達の視線の先、部屋の最奥には見覚えのありすぎる男、ルーサーとシバに酷似した姿の少女、ハリエツトがわたし達を見つめてい

た。

「貴女も居たんですかハリエツト」

「居ましたよ。貴女はだいぶ棘が取れたようですねシバ」

本来なら同時に存在することのできない2人が邂逅し……

「また貴方に会うことになるなんて本当は想像もしてなかった」

「僕としては宿主くんの中からずっと観ていたけどね」

本来なら2度と邂逅するはずのない2人が再び顔を合わせた。

「それでいまのあなたはと言う状態なの？」

わたしは一先ず優先事項を決めて現状の確認を行うことにした。

「ふむ、まあ僕に限って言えば君の知る僕とは全く違うと言えるだろうね。まずこの世界に虚構機関が存在していないし、初代クラリスクレイスたるアルマも存命だ。まあ、封印されたエルダーのせいで現役から引退するために10年前に消息を絶った君がその名を襲名していた」

客観的にただ報告書でも読むかのように……いや、実際にタブレツトに書かれていることを読み上げているだけなのだが無機質に興味なさげに告げたルーサーへハリエツトは大きく咳き込んだ。

「まあ、見ての通り僕にはハリエツトという監視役がいてね。おいたなんてする暇さえ与えられないわけだ。僕はダークファルスとしてこそ肉体を侵食されているがハリエツトが近くにいることが幸いして「僕」として覚醒するのは早かったようだ。他のダークファルス達はどうか知らないけどね」

「ルーサー兄様が口にしてていることはひとまず事実ですマトイさん。私も守護輝士がこの世界のどこかにいるのだろうとは思っています。彼女ならば必ずここを訪れるだろうと兄様の補佐として活動をしていました」

ハリエツトさんから補足するようにそう言われてわたしはひとま

ず頷いた。

「では、私からも質問をしても?」

「ああ、構わないとも」

小さめに手を挙げたシバはルーサーへと質問を始める。

「まず、貴方はどうして私と敵対していた頃の記憶があるのです?」
「それは単純だ。君は知っているだろうが僕は守護輝士の体内に存在していたからね。彼女の時間遡行に合わせてここに飛ばされた挙句この世界の僕へ憑依させられたわけだ」

さも当然のように告げたルーサーにわたしは卒倒しそうになった。

ちよつと待つて欲しい、アリシアがダークファアルスのヒューナル形態に近い物へと姿を変えられるようになったのは知っていた。

実際に何度も目にしてその力に助けられていた。

だが、ルーサーがアリシアの中にいた?

それはつまり他のダークファアルス達もアリシアの中にいたということになるのだろうか。

「待つて、確認だけさせて欲しいんだけどダークファアルスがアリシアの中にいたの?」

「そうだと言ったつもりだけどね」

「あのアリシアの使つてたヒューナル形態みたいなのは……」

「僕たちが彼女に力を貸していたから使えたんだよ」

ルーサーから告げられた事実は今度こそ意識が飛びそうになる。

つまり、オメガから帰つてきたアリシアは4体のダークファアルスをその身に宿していたことになるのだろう。

「ま、待つてくださいルーサー兄様。その話が本当なら成長したマルガレータも守護輝士の中にいたんですか!」

「ああ、【若人】の依代として宿主くんの中にいたね。お嬢さんにわかりやすく言えば、君が倒したあの【若人】だ」

ビキリと額に青筋が浮かんだような気がした。

「あのダークファアルス、死んでまであの人に迷惑かけたんだ……」

「落ち着きなさいマトイ」

ほんの一瞬だけ何か良くない感情が渦巻いた気がしたけどきつと

気のせいだろう、シバが肩に手を置いてくれたおかげで少しだけ落ち着くことができた。

「取り敢えず軽い雑談はこの辺りにしておこうか。それで片翼の守護輝士と終の女神は僕の元に何をしに来たんだい？まさかただ雑談をしにきたわけではないだろう？」

「単刀直入に言えばここにアークスで使用している船があれば借りたのです。それと、守護輝士をあゝの黒い惑星から救出するために協力してもらえないかと思ひまして」

ルーサーの問いにシバは即座に答えた。

本当に少し前の彼女ならば人に『借りる』や『協力して欲しい』なんて言わなかっただろうに、何が彼女をここまで変えたのだろうか。

対してルーサーはシバの答えに納得するように何度も頷き、ハリエツトさんの方を見て2人で首を縦に振った。

「君たちの行おうとしていることに僕も異論はない。手を貸すのも吝かではないがね。君たちに手を貸すことによる僕への見返りは何かあるのかい？」

「……わたし達が貴方の指揮下に入る」

「マトイさん!？」

「ほう、考えましたね」

「……………」

わたしが出した答えはわたしとシバがルーサーの指揮下に入ることだった。

だけどそれだつて出鱈目に考えたわけではない。

以前にアリシアと話し合ったことがあったのだ。

わたし達の知るルーサーは本当のルーサーなのかということ。

わたし達の知るダークファアルスの依代にされた人間はダークファアルスに意識を侵食されて本来の人格とはかけ離れたものになる。

依代にされた時間が長ければ長いほどそれは本来の人格を模倣してそれを自分の「欲」を叶えるために利用し始める。

アリシアから聞いたオメガでのルーサーの話。

目の前にいるハリエツトさんが兄様として慕うルーサー。

そしてわたしの知るルーサーとは仕草や話し方は同じであれど今まで行ってきたであろうものは全くの逆なのだ。

「まだ、信用はできない。」

でも、かつて共に戦ったハリエツトさんの信じるルーサーを信じることにしよう。とわたしも思えた。

「ふむ、まあ悪い話ではない。そうなれば僕の直属としてはハリエツトにクーナとハドレットだけでなく。君とシバさえ僕の戦力になるわけだ」

ルーサーはしばらく考え込んだ後、その青い瞳をわたしたちに向けて口を開いた。

「いいだろう、君たちの要請を承ろう。明日までに君たちのアークスとしての認証コードを作っておくから、今日はひとまず休むといい。ハリエツト、2人を部屋まで案内してあげなさい」

「はい、ルーサー兄様。それではマトイさんシバ、私についてきてください」

ハリエツトさんに導かれるまま、わたし達は部屋から退出した。

「ハリエツト、後で少し話があります。時間を作りなさい」

「貴女は私にはなんの容赦ありませんね」

「当たり前でしょう、なぜ同一人物のような人間に容赦などしなければいけないんですか」

「言いたいことはわかりますが……」

「……本当ならルーサーにだって一言言ってやりたかったんです。それを耐えて何も言わなかったのだから多めに見なさい」

忌々しいと言わんばかりにシバが吐き捨てるのをハリエツトさんは苦笑いしながらシバを少し見つめた。

「……なんです？」

「いえ、あそこまで世界の破滅を望んでいた貴女がそこまで棘の取れた理由を知りたくて」

「話しませんよ。あの思い出は私だけの大切な記憶ですから」

誰が原因になったのかなどわたしもハリエツトさんも聞かなかつた。

そんなのわかりきっているのだから、世界を滅ぼそうとしたシバともアリシアは何かしらの方法で分かり合えたのだろう。

「さて、シバはこの部屋をマトイさんはお隣の部屋をお使いください。食事は私が運んできますし、室内のものは自由に使ってください。構いませんので」

ハリエツトさんはそう言ってシバと一緒に部屋に入って行ってしまった。

わたしも案内された部屋に入り、一通り部屋を見渡してから室内のシャワーを浴びて戦闘でかいた汗を流して冷えた体を温めた。

シャワーから上がれば一気に溜まっていたであろう疲れが襲ってきてそのままベットへと横になる。

今思えばわたしはマザーシップ・シバの突入の時から一度も睡眠をとっていなかったのだと思い出して疲労の理由に納得して意識を手放した。

第六話 わたしだけのおもいで

「それで、話とはなんででしょうか？」

マトイと別れて部屋に入れば一緒に入ってきたハリエツトが開口一番そんなことを聞いてきた。

「余裕がありませんね。そんなに私が怖いですか？」

「そういうわけではありませんよ。ただ、2人の食事を用意しなければならぬので時間がありません」

「だから後でもいいと言ったでしょうに」

私が呆れたように肩を落とせばハリエツトは少し黙った後、何かを理解したように慌てふためいた。

これだけで、彼女がどれだけこの世界で……そしてオメガで周りの人間に恵まれていたかがわかってしまった。

「大した内容ではないですから空いた時間にでもまた来なさい。貴女は貴女のやることがあるのでしよう？ 私よりもそちらを優先なさいな」

一人でイラついていて私が馬鹿みたいだった。

本当なら私にだって享受できたかもしれない可能性。

ただ、誰かと笑って過ごしてみたかったと思っていた私の我儘。

「そんなこと、言わないでください」

「は？」

「貴女はもう一人の私のようなものでしょう。その身体は本来なら私のものであるから」

「だったらなんですか、私にこの器を手放して消え去れとでもいうつもりで？」

「そんなことは言ってもません！ただ私は……」

気まずそうに視線を逸らして俯くハリエツト。

どうしてこの娘は肝心なところで自信をなくすのだろうか。

オメガでもそうだった、普段は毅然とした態度で入れるくせに自分の知るものや助けを乞うものに甘い感情を残してしまう。

だから、あのように連れ去られいいように利用されてしまうのだ。

そんなだから肉体から追放されて世界から排斥されてしまったのだ。

「……一先ずこのままではお互いに話などできないでしょう。私も「ヒト」の肉体に作り替えられた所為で一度睡眠を取りたいのです」「わかりました……その事についても後で聞かせていただきますから」

ハリエツトが退出するのを見送って、私は用意されていたベットへと横たわる。

眠気というのをこの初めて感じたが、なかなか悪くない感覚だと思いながら私は瞳を閉じた。

気がついたら、地球の街を歩いていた。

ああ、気がついてしまった。

これは私がこの世界に希望を持ってしまった日の夢だ。

最終決戦の数日前、なかなか落とせなかった地球の見物に行った時の出来事だった。

あまりにも戦意のないアリシア守護輝士に出会ってしまったのは。

この出会いが、憎しみと世界の破滅しか望んでいなかった私を変えてしまったのだ。

「おや、アークスの最後の砦たる守護輝士がこのような所で油を売っていいんですか？」

「なんだシバか……見ての通り視察だよ。ほぼオフみたいなものもあるけどね」

耳につけたインカムのようなものを鬱陶しそうに外して彼女は私へと言葉を返した。

「いいんですか？シエラさんからの通信だったのでしょうか？」

「いいのいいの、さつきも言ったけどオフだし。貴女の方は？」

「そうですね、貴女と同じようなものです」

いつものように、彼女に喧嘩を売るような態度で言葉を返せばアリシアは呆れたようにため息を吐いた。

「……なんですか？」

「いつまでもそうやって気を張ってて疲れないの？」

「……」

気を緩める瞬間など、私には存在しないのだ。

ヴァルナとミトラがこの守護輝士に討たれ、今度はその剣先が私の首元に突きつけられているのは分かっている。

もはや初めのような余裕など私にはなかった。

確かに、私は彼女を大きく上回る力を持っている。

アークスがどう足掻いたところで私の力を抑え込めるのはほんの少しだろう。

——だが、守護輝士だけは違う。

私と同等の器がある彼女ならばあのフォトナー共と同じことをすれば私と並ぶことが出来る唯一の存在でもある。

世界の器とはそういうものなのだ。

それに、守護輝士が私と同等のフォトンを扱うようになればどのような権能が開花するかも判ったものではない。

故に、彼女を前に一瞬たりとも気は抜けないのだが……

「まあ、それは貴女の生き方だから私が口を出す問題ではないかな」

まるで諦めたように守護輝士はそう口にする。

それが何故だが無性に頭に來たのだ。

私が享受できなかった当たり前を過ごしているくせにと、思ってしまった。

「だったら、貴女が今日一日私をエスコートなさいな。私に復讐と破壊以外の何かを教えてみなさい」

勢い余って口にしてしまった言葉を後悔したのはその瞬間だった。

守護輝士の口がニヤリと大きく歪んだのをみて私は確信した。

——『ああ、選択肢間違えたな』と

「そんなこと言っていていいんだ。それじゃあ、まずはその服屋に入る
うか」

「え？は？ちよつと待ちなさい！」

先程までとは違う生き生きとした顔を見てまんまと嵌められたと
気がついたが時既に遅し、私は無理やり手を引かれて服屋へと連れて
行かれる。

引かれた手はとても暖かかった。

その後、私の服を選ぶ——もとい着せ替え人形にされて店を出た
のは入店してから2時間以上後だった。

すっかり地球で出回ってもおかしくない若者スタイルに変えられ
た私はそのまま手を引かれて街へと連れ去られる。

クレープというものを初めて食べた。

知識では知っていても初めて食べるそれはとても甘くて美味だっ
た。

遊園地と呼ばれる場所に連れて行かれた。

ありとあらゆるアトラクションやからくり小屋に入つて一喜一憂
した。

初めて誰かと共に食べる食事は、とても……美味しかった。

私にとつて、なんの価値もないと思っていた人の営みは……あまり
にも暖かかった。

「どうだった？今日私と一緒に遊んでみて」

そんな時間も終わりが近づく。

すっかり日が暮れ、あたりは人口の光で明るく照らされていた。

守護輝士にそう問われて、私は少しだけ口を開くことができなかつ
た。

楽しかった、ただその一言を口にできないでいた。

そを口にして仕舞えば私に従い、彼女に討たれたミトラとヴァルナ
の忠義に報いることができなと思うってしまったから。

「貴女が今日感じたこと、それがどんな感情かは私はわからないけど
ね。私は貴女とこうして遊べて楽しかったよ」

「私には……その言葉を口にする権利などありませんよ」

苦し紛れに紡ぎ出した言葉を聞いてもアリシアはただ空を見上げて再び口を開いた。

「私もね、きつと貴女と同じことをされれば……同じように世界を恨んでしまうと思う。マトイを救えなかった私は確かにダークファルスに身を墮としたからね」

「なにが言いたいんですか？」

「だから、シバのやろうとすることには私が口を出すことは出来ない。だけど、私がアークスの最高戦力として対立している以上、互いの立場は明確でしょ？」

何がおかしいのかアリシアは少しだけ微笑んで私の目をしっかりと見つめて一呼吸置いて……私の心を打ち砕いたのだ。

「だからさ、最後の最後に全力で私たちが戦って……どちらも生き残ることができたら、またこうして一緒に遊びに行こう。今度はお互いに対立する敵同士じゃなくて、友達として」

そう、私はこの言葉に自分の復讐心を持って行かれてしまった。

誰にも求められず、ただ利用され、憎まれた私に手を差し伸べてくれた。

「……そのような未来がもしあるのなら、また付き合ってあげますよ」
「それじゃあ、私も頑張らないとなあ。君はもう少し普通の幸せってものを享受してみるべきだよ」

本来ならありえる筈のなかった未来が、この瞬間に生まれてしまった。

この時、今日のように遊べるような日がまだ続けばいいと……ヴァルナとミトラと共に普通のヒトのように過ごしてみたかったと、私の中に確かにそんな感情が生まれた瞬間だった。

目を覚ます。

瞳を開けば映り込むのは無機質な研究室のような天井。

「……この思い出は私だけの大切な思い出なんですから」

そつと胸に閉じ込めるように私は再び瞳を閉じた。
少しだけ流れる涙に気がつかないように。